

ナーガラージャ型ガードストーンの造形の展開と造立年代の考察

－ガードストーンの形式と関連作例との比較を通して－

Study on the Development of Nāgarāja Guardstone Images and the Consideration of their Chronology

－ Focusing on the Form of Guardstone and Related Examples －

金田 紗弥

Saya KANADA

崇城大学大学院芸術研究科修士課程美術専攻

Division of Fine Art, Graduate School of Art, Sojo University

序論

ガードストーンは、仏教の守護や土地や時代の繁栄を象徴するものとしてスリランカの寺院や王宮趾の入口の両側に対になって表される浮彫である。ナーガラージャ型ガードストーンは、ガードストーンの中でも時代的に最も新しく造立されたもので、現在も数多く残っている。稿者は、卒業論文「スリランカのガードストーン研究－ナーガラージャ型ガードストーンの様式による年代考察－」において、ナーガラージャ型ガードストーンの造立年代の推察を試みた。その際、①装身具の表現、②上半身から下半身にかけての人体表現、③侍者の表現の3つの造形的特徴に着目し、スリランカの菩薩像やインドのガナ像などの関連作例と比較することによって推定を行った。最終的に、ナーガラージャ型ガードストーンの展開は大きく3期に分けられると結論づけた。すなわち、第1期は7～8世紀、第2期は最盛期の8～9世紀、第3期は12世紀の造立とした。卒業研究では、比

較の対象とした関連作例の多くはスリランカのものであった。しかし、スリランカの仏教美術はインドの作例から多大な影響を受けており、より詳細な造立年代を推定するためには、スリランカとインドの交流関係や関連する作例と比較、考察する必要がある。そのため本稿では、ナーガラージャ型ガードストーンの造形的特徴をより詳細に分析し、造形の展開を探るとともに、スリランカやインドの菩薩像やヒンドゥー教像などの関連作例との比較を通して、ナーガラージャ型ガードストーンの造立年代をより精査することを目的とした。具体的な考察の展開は以下の通りである。

まず第1章では、スリランカとその周辺地域であるインドと東南アジア各国にどのようなナーガラージャ像が展開・分布しているか整理した。そして、それらの造形的特徴を抽出・比較し、各国間の影響関係や特にスリランカとの影響関係が強い地域を見出した。

続いて第2章では、スリランカと関係が

深いと考えられる南インドとの関連について、歴史やこれまで考古学上で発見されているものや仏教美術の作例を挙げ、二国間にどのような影響があったのかについて概観した。

最後に第3章では、ナーガラージャ型ガードストーンの造形的特徴について、①満瓶と②腰布、③侍者像の3点に着目し、ガードストーンの造形の展開や分布にどのような変化があるか考察した。そして、スリランカやインドの菩薩像やヒンドゥー教像、ガナ像などの関連作例と比較し、ナーガラージャ型ガードストーンの造立年代の推定を行った。

第1章 スリランカと周辺地域におけるナーガラージャ像の分布と展開

ナーガラージャ像に関して、ファーガッソンの *TREE & SERPENT WORSHIP*¹ やシュレーダーの *Buddhist sculptures of Sri Lanka*² で多くの作例やその造形について取り上げられている。しかし、それらの展開や他国間の影響については詳しく言及していない。そのため本章では、スリランカのナーガラージャ像がどのように展開したのか、さらにインドや東南アジア（カンボジア、タイ、ベトナム）にはどのような作例があり、どのように展開したのか考察した。

まずナーガラージャ像の造形は、コブラの姿の場合と人格化して表される場合の2種類に分かれた。それに加えて、ムチリンダ龍王の護仏の作例の数が著しく目立ったため、各国の作例について、①コブラ型、②人格化型、③ムチリンダ型の3種類に分

けた。

その結果、各国で全種類のナーガラージャ像を確認することができた。まずインドでは、①コブラ型と③ムチリンダ型の作例が最も早く、紀元前2世紀に登場した。その後紀元後1世紀から3世紀にかけて、①コブラ型と②人格化型、③ムチリンダ型のすべての種類の作例が見られた。5世紀以降になると、①コブラ型と②人格化型の作例が主に表され、③ムチリンダ型の作例は姿を見なくなった。地域的な分布を見ると、初期はバールフットやサーンチーなどの中インド、1～3世紀にはアマラーヴァティーなどの南インドで数多く見られ、その後は各地域で作例が見出され、地域的な偏りは見られなかった。それらの造形はシンプルで、龍蓋の数は5つで頂部の頭部のみ正面を向き、他の頭部は頂部の頭部の方を向く。

続いて東南アジアで最も多くの作例が確認できたカンボジアでは、6～7世紀のリンテル上に見られる②人格化型が最も早く登場した。その後10世紀のペディメント上に①コブラ型が、11世紀には③ムチリンダ型の作例が表されるようになり、12～13世紀には最盛期を迎え、③ムチリンダ型の作例が数多く造られた。地域性については、時代や地域による偏りは見られず、各地で見出されていた。カンボジアの造形は、龍蓋の数は7つで、縦に長く広がっている。ナーガの鼻先は馬のように突起し、鼻孔が大きく表され、頂部のナーガは正面を向き、他のナーガは上向きである。

次いで多いのがタイで、6～7世紀に初期の③ムチリンダ型の作例が登場し、14

世紀まで同様の③ムチリンダ型の作例のみ見出された。地域的な偏りについては、見出せた作例が僅少なため明確にはできないが、南部での発見が多い。タイの造形は2種類に分かれ、小さめの頭部が1つ1つが重なり合うように表され、全て正面を向き、鼻先の突起は控えめなものと、頭部が一体化され、頂部のみ正面を向き、他の頭部は上向きで鼻先が突起しているものであった。前者はインドの作例に、後者はカンボジアの作例に類似している。

次にベトナムで自身が調査し確認できた作例は2点のみであったが、6世紀と12～13世紀の③ムチリンダ型の作例であった。地域的には、両者とも当時の都であったヴィジャヤの近辺から出土している。造形については、タイと同様の2種類に分かれ、他国からの影響が及んでいることがわかった。

そしてスリランカでは、②人格化型の作例が1～2世紀の仏教伝来の地ミヒンタレーで見出された。その後当時の都であったアヌラーダプラに大仏塔が造立され始めると、ワーハルカダ（仏塔の四方に突き出た構造物）の一部として①コブラ型や②人格化型の作例が見られるようになった。そして6～8世紀まで、③ムチリンダ型やガードストーン上の②人格化型の作例が見出された。③ムチリンダ型は8世紀頃までで姿を消す。一方でガードストーン上の②人格化型は、インドのチョーラ朝に支配されるまでの12～13世紀まで継続的に見られた³。地域的に見ると、当時の都であったアヌラーダプラ周辺でほとんどの作例が継続的に発見されており、ポロンナルワよ

り南方には磨耗が激しい作例が多く、現地での調査が必要である。龍蓋の数は5つあるいは7つが多く、①コブラ型の場合は円を描くような形あるいは扇状に広がり、②人格化型の場合は円錐形の宝冠をかぶっているためやや縦長に広がる。時代が下るにつれて次第に精緻な作例が多くなるが、ナーガの造形の基本的な要素は大きく変化しないことがわかった。

そして、各国間で与えた影響関係について整理すると、ナーガの龍蓋の造形は大きく2つに分かれた。すなわち、A、頭部が小さく、各頭部が重なり合う表現、扇状に広がる特徴を持つものと、B、頭部が大きく鼻先が突起しており、龍蓋が一体化しているものである。①コブラ型は、インドやスリランカでは2世紀にAの形で伝わるが、カンボジアではBに近いが独自の形で発展したと考えられた。②人格化型は、1～2世紀にインドからスリランカへ伝播し、特に8～9世紀に盛んに造立されたガードストーン上のナーガラージャ像の装身具や姿勢は、南インドの仏伝図や仏像などと類似しており、大きな影響があったと窺えた。なお、東南アジア各国では、②人格化型の作例は見出せなかった。③ムチリンダ型は、3～4世紀にインドからスリランカにAの形の作例（図1）が渡り、6～7世紀のスリランカの作例が同時代のタイやベトナムに影響を与えたとみられる。一方カンボジアではBの形が発展し、その後タイやベトナムにも伝わったと考えられた。

以上のように、インドからスリランカへ3種類のナーガラージャ像が伝播し、特に8～9世紀にはナーガラージャ型ガードス

トーンが数多く造立された。しかし、東南アジアには人格化されたナーガラージャ像は見出せず、ムチリンダ龍王の作例が好まれ、盛んに造られた。したがって、スリランカのガードストーン上のナーガラージャ像は、インドから伝わった後、独自の形で発展を遂げたことがわかった。そして、スリランカの作例は、特に南インドの影響が大きいことを指摘した。

第2章 スリランカ仏教美術と南インドとの関連について

前章で、スリランカのナーガラージャ像の造形には、南インドの関連する作例の影響が大きいことが推察できた。そのため本章では、スリランカと南インドの歴史を概観し、つながりを証明する具体的な発見や作例を見出すことによって、二国間でどのような交流があったのか考察した。

まず、スリランカの歴史に南インドとの抗争の歴史などを交え、どのような政治的な交流があったのか概観した。スリランカでは、紀元前3世紀にインドから来島したアショーカ王の息子マヒンダによって仏教が伝えられた。同時に、当時の都であったアヌラーダプラに最古のストゥーパであるトゥーパラマが、前2世紀にはルワンウェリセーヤが建立された⁴。前145年に、タミル人エララによってアヌラーダプラが侵略され、エララが即位したが、その後前161年にはシンハラ人のドゥッタガーマニー王がエララを破って即位した。そしてスリランカの仏教教団は、大寺派（マハーヴィハーラ派）と無畏山派（ア

バヤギリ派）に分裂し、前89年に無畏山派はアバヤギリ・ダーガバを建立した。3世紀末には、祇陀林派が独立し、ジェータヴァナ・ダーガバを建立した。その後4～5世紀に『ディーパヴァンサ』、5世紀末により詳細な記録を加えた『マハーヴァンサ』というスリランカの歴史を記録した史書がそれぞれ成立した。『法顕伝』を著し、仏跡を巡った法顕がインドとスリランカに滞在していたのもこの頃のことである。そして7世紀頃の南インドのパッラヴァ朝やパーンディヤ朝ではヒンドゥー教が隆盛しており⁵、両朝はアヌラーダプラの王統と手を結んだり、抗争を繰り返したりしていた⁶。そして840年、パーンディヤ朝がアヌラーダプラを占領するが、862年にシンハラ人のセーナ王がパーンディヤ朝の都マドゥライを攻略し、アヌラーダプラの支配をシンハラ人に戻した。スリランカではその後もタミル勢力の侵攻が続いた。993年に南インドのチョーラ朝のラージャラージャ1世がアヌラーダプラを攻略し、1017年にポロンナルワに遷都した。チョーラ朝の支配が続く中、1070年にヴィジャヤバーフ1世がその支配を破り、仏教再興のためにミャンマーのパガン朝から高僧を招き、大寺派を復活させた。そして12世紀中頃には、バラークラマバーフ1世の指示により、無畏山派との抗争に大寺派が勝利し、それ以降のスリランカの仏教は大寺派に統一された。その後13世紀中頃、タミル勢力の侵略を受け、ポロンナルワは陥落し、ダンバデニヤに遷都した。本研究の対象である数多くのガードストーンが確認できたのはポロンナルワ期までと考

えられるため、歴史の概観はこれまでとする。以上のように、スリランカでは仏教が長く信仰され続け、タミル勢力の侵攻が度々あったことがわかった。

次いで、スリランカと南インドの交流に関連すると推定された具体的な発見や作例について確認した。まず考古学上の証拠として、ストラボンの『地理誌』による記録やスリランカや南インドの遺跡に遺る銘文などの事例が数点挙げられた。その中でも、近年スリランカ南部のゴダワヤから8km離れた海底で発見された沈没船に遺っていた砥石もしくは儀式用の椅子、鉄や銅製の棒、黒緑赤色土器、ガラスのインゴットなどが、南インドとの商業的なつながりを示す証拠となっていることがわかった⁷。砥石もしくは儀式用の椅子とされているものに関して、類似したものがゴダワヤに近いティッサマハーラーマのヤータラ・ダーガバで見出されている。本品にはシュリーヴァッサの文様が刻まれており、これはアヌラダプラのジェータヴァナ・ダーガバのワーハルカダ柱に刻まれたものと類似している。この文様が仏教的文脈の象徴であることが指摘されている。そしてゴダワヤの沈没船から発見されたものにも、ナンディパーダとシュリーヴァッサの文様が、さらに魚のシンボルも2つ刻まれている。このシンボルは、紀元前3～2世紀のインドのサンガム時代のコインにも同様のものが見られ、コインの表に寺院が、裏に魚が刻まれ、仏教的文脈のシンボルと考えられた。このように、沈没船から発見されたものは、ヤータラ・ダーガバの文様から、仏教に関するものであり、スリランカと南イ

ンドの交流の様子を窺う資料と考えられよう。さらに、ガラスのインゴットに関しても、ガラスの断片の化学成分を用いた調査が行われ、その結果、南インドのタミル沿岸で生産されていたガラスと、化学的成分の多くが一致していることがわかり、紀元前1世紀以降のものであることが推定された⁸。オスムンド・ボペアラッチラ研究者は、沈没船に関するこれらや他の調査結果から、南インドと交流があった沈没船が難破した年代は紀元前2～前1世紀に遡ると考察している⁹。

そして、ティッサマハーラーマのサンダギリ・ダーガバの付近で発見された仏立像は、右手を欠損しているが、施無畏印であったと考えられており、左手は左肩辺りで僧伽梨の端を執っている。肩幅が広くどっしりとした量感で、僧伽梨を左肩からかけている。衣文は規則的な表現が施され、肉髻は螺髪で覆われている。このような特徴はアマラーヴァティーやナーガールジュナコンダの仏像を想起させ、特に3世紀晚期～4世紀初頭のナーガールジュナコンダのシーハラ・ヴィハーラから発見された仏像は、サンダギリ・ダーガバの仏像と近い作例とされる¹⁰。

次いで、スリランカの仏塔の四方に突き出た構造物のワーハルカダに付属する装飾の中で、南インドとの関連がみられるものはいくつか確認できた。ジェータヴァナ・ダーガバの東面ワーハルカダ柱の最上段には、「一切施王本生」の場面が表されている(図2)¹¹。本作の画面中央では、王が剣で自身の足の肉を切り取っており、その脇に立つ人物が王の肉の重さを測るための

秤を持っている。本主題は、アーンドラ彫刻に多く見られ、アマラーヴァティーとナーガールジュナコンダの作例（図3）に見出され、ジェータヴァナの作例がこれらのアーンドラ彫刻の伝統に由来することがわかった。

さらに、ガードストーンにも表されているパドマニディとシャンカニディ像についても、関連作例を見出すことができた。両者はクベーラの従者で、財宝の一部である蓮華と法螺貝を人格化して表現されたものである。スリランカにおける作例は、ガードストーン上の浮彫表現に限られ、アバヤギリ・ダーガバやヴィジャヤバーフ1世の王宮趾に遺っているものがよく知られている。パドマニディ・シャンカニディの造形の由縁として、アーンドラ地方のナーガールジュナコンダで見出された3～4世紀の一对の丸彫の作例がある。本像は、太鼓腹かつ短足の人物として表現され、各像はそれぞれ蓮華と法螺貝を象った被り物を被っている。両像とも頭頂からコインの束が溢れ出て垂下し、片手で抱えるように手に執る。また、5世紀の東ヴァーカータカ朝のラーマギリにみられるニディ像は、ナーガールジュナコンダの作例と類似した造形で、頭頂から溢れ出るコインの束は像の足元まで垂下し、像はその上に立っている。例えば、トゥーパラーマの参道入口には、片側にのみシャンカニディを表したガードストーンが遺っている。本像の造形は、上述の作例と類似し、垂下したコインの束の上に立ち、棍棒のように片手に執る。これは、ナーガールジュナコンダやラーマギリの作例の融合した表現になっており、5世

紀以降の造立と推測できた。

以上のように、スリランカの仏教美術は、政治上の交流やそれを裏付ける考古学上の発見、スリランカにおける作例などから、長い期間にわたって南インドの影響を受けていたことを明確にすることができた。特に、3～4世紀のアマラーヴァティーやナーガールジュナコンダのアーンドラ様式の特徴を踏襲した作例がスリランカで多く見出された。

第3章 ナーガラージャ型ガードストーンの造形の展開と関連作例との比較を通した年代推定

最後に、ナーガラージャ型ガードストーンの造形や分布の展開を探り、ガードストーンの造立年代を推定するために、造形的特徴の分類やスリランカやインドの関連作例との比較を行った。本研究では、シュレーダーの *Buddhist sculptures of Sri Lanka* において紹介している数多くの作例に、稿者が以前現地で調査した作例を加えて合計72基を対象とした。

まず、ナーガラージャ型ガードストーンの基本的な造形を確認した。ナーガラージャは龍王の名にふさわしく貴人の姿で表され、頭部に龍蓋があるのが特徴である。ナーガラージャの装身具は非常に豪華で、高い宝冠を被り、上半身は裸で連珠の首飾りや胸飾り、腕釧、臂釧などを身につけている。胸の下方には、南インドや東南アジアにおいて仏教やヒンドゥー教の守護神像に見られるウダラバンダと呼ばれる腹帯を巻きつけ、肩から聖紐を垂下させている。

下半身は腰布で覆われ、腰で数段の帯を作り、その中央で結び目を作る。足を覆う布は体にぴったり巻きつき、所々に体の動きに合わせた衣文線が表現される。また、ガードストーンは建物の入口の左右に一对になるように置かれている。入口中央の方の手で満瓶を肩上に持ち上げ、もう片方の手は腰の横辺りで花が咲いた茎を掴んでいる。そして入口中央に向かって腰を突き出し、体全体で「く」の字を描くような姿勢を執る。

満瓶は、水瓶から茎が伸び、円形や雫型などの抽象的な形の花や葉によって生い茂って表される。ナーガラージャ型ガードストーン上の満瓶は、縦に長く伸びて円錐形のような形になっている。一方、茎には節目が施され、そこから上部に向かって花や葉が生い茂っている。花や葉の表現は満瓶と同様に抽象的な形で表される。

また、ナーガラージャの足元には、左右に侍者として小人型のガナ像が表現されている。ガナ像は片方のみの場合と両側にいる場合がある。ガナ像は太鼓腹かつ短足の小人の姿で表され、装身具のないものもいれば、宝冠や首飾りなどの豪華な装身具を身につけるものもある。

稿者は卒業研究において、ナーガラージャ型ガードストーンの造立年代を3期に分けた。すなわち、第1期の造形は、装身具は豪華だが衣文線の表現は少なく、ウエストの絞りが細く、動きの少ない侍者を従えるもので、7～8世紀の造立とした。第2期は、豪華な装身具を身につけ、衣文線の表現も美しく、人体表現は豊かである。さらに、侍者の髪型は巻毛で、首を水平に曲

げるもの、ナーガラージャ側の腕を上げるものも多く、8～9世紀の造立とした。第3期は、豪華な装身具を身につけ、豊かな人体表現が施され、紐状の髪を結い上げてナーガラージャ側の腕を上げる侍者を従えるもので、12世紀の造立とした。

そして、確認できたガードストーンの造形の展開を調査するために、特にその造形の変遷が確認できた①満瓶、②腰布、③侍者像について、造形的特徴を見出して分類し、関連作例と比較した。

まず①満瓶は水瓶から溢れて生い茂る花や葉の部分が異なるため7類型に分類でき、それぞれを類型①-I～①-VIIとした(図4)。全ての類型に共通して、頂部には雫型の蕾が載り、花や葉は楕円形や半円形など抽象的な形で表現されていた。抽象的なモチーフや溢れ出る花や葉が左右対称に表される点、水瓶に装飾が施される点などは、アマラーヴァティーで見出された2世紀の石板上の満瓶(図5)の表現と類似している。スリランカにはナーガラージャ型ガードストーンより以前に満瓶が表されたガードストーンが造立され、アマラーヴァティーの表現が踏襲されている。その表現が、ナーガラージャ型ガードストーンの満瓶の造形に用いられ、ガードストーンの間隙を埋めるように、次第に縦に伸び、より精巧に表されるようになったと考えた。造形の展開は、類型I→II→III→IV→V→VI→VIIの順になると推測した。

次に②腰布は、帯の結び目や衣文線、装飾の表現の差異から、8つの類型に分類でき、それぞれ類型②-I～②-VIIIとした(図6)。腰布の基本的な造形は、下半身

を覆い、体にぴったり張り付いて衣文線が施され、足首の辺りで裾がはっきりと表現される。腰の左右には結び目（カティストラ）が大きく表され、その下方に布がたなびく。腰布は上部の3段の帯で留められ、その中央で左右に輪を垂下させた結び目を作る。3段の帯のすぐ下方に幅が広い布1枚で帯を作っている。3段の帯からは、紐状や数珠状の装飾が数本垂下しており、そのうちの2本は繋がり、両太股をまたがって弧を描いている。繋がった装飾の下方には、腰帯から垂下した1枚の布でもう一つの弧を描いている。肩から足元まで垂下する聖紐は、ふくらはぎの前で両足をまたいで背中の方に周っている。8つの類型の中では、類型②-Ⅳがこれらの特徴を備えた基本的な造形になっており、最も数が多かった。この基本的な造形は、8世紀のパッラヴァ朝のヴィシュヌ像（図7）に確認でき、影響が大きいと考えられよう。類型②-Ⅷの弧を描いた装飾は他の類型よりも多く表され、11世紀のチョーラ朝の造形に多く見られる形であることもわかった。腰布の表現は、装飾が少なく、衣文線がないシンプルなものが初期の造形と考えられ、基本的な特徴を備えた造形が数多く、中には結び目や弧を描いた装飾や帯の位置が異なる類型が度々見出された。そしてポロンナルワで見出されたものは類型②-Ⅳにあたり、基本的な特徴を備えてより豪華で精緻な表現が施され、ナーガラージャ型ガードストーンの中でも新しい造立のものと推察した。造形の展開は類型Ⅰ・Ⅱ→Ⅳ→Ⅲ→Ⅴ→Ⅵ→Ⅶ・Ⅷ→Ⅳと推測した。

最後に③侍者像は、4つの類型に分類でき、それぞれ類型③-Ⅰ～③-Ⅳとした（図8）。侍者像は、太鼓腹かつ短足の小人の姿で、多くはナーガラージャの膝上辺りの背丈であった。身につける装身具は、臂釧や腕釧、ウダラバンダ、腰巻などで、類型③-Ⅰは装身具が少ない。髪型は紐状と巻毛のものに分かれ、類型③-Ⅲは全て巻毛で、類型③-Ⅳは紐状の髪を高く結い上げるものが多い。最も数が多い類型③-Ⅳの侍者は、太鼓腹や腕、足など体全体が太く、どっしりとした量感で表され、装身具も非常に豪華である。侍者像の中でも最も精巧に造られた類型③-Ⅳの造形は、南インドのタミルナドゥのブラフマプリーシュヴァラ寺院（9世紀末～10世紀初頭）の、太鼓腹で紐状の髪を結い上げ、豪華な装身具を身につけたガナ像（図9）と類似し、大きな影響を受けていることがわかった。造形の展開は、類型Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ→Ⅳの順になると考えられ、初期のものは腕や足が細く、背丈は小さめである。次第に体が太くなり、全身の量感がしっくりし、装身具も非常に豪華になる。そして背丈も大きくなり、中央のナーガラージャを讃えるように内側の腕を頭上に上げる姿勢を執るもので統一されるようになると推測した。

以上の推察を整理し、前章で確認したスリランカと南インドとの交流関係を踏まえて、造形の展開と造立年代の推定を行った（表1）。①満瓶、②腰布、③侍者像の全てにおいて、ナーガラージャ型ガードストーンの造形は、装飾がシンプルなものから、時代が下るにつれて次第に豪華になり、複雑化して精緻な表現が施されるよう

になると考えられた。それらの表現は、次第にスリランカ独自の表現として発展した。①満瓶は、関連作例が僅少なためそれだけで造立年代の推定は難しいが、②腰布と③侍者像は、大きく8～9世紀、10～11世紀の造立である類型が推定できた。そのため、区分1を8世紀以前、区分2を8～9世紀、区分3を10～11世紀、区分4を12世紀の造立と分けた。区分1の造形は、磨耗が激しく装身具や衣文線の表現などが不明、またはシンプルなものであった。区分2は最も作例が多く、装身具の基本的な構成は同様で、帯や装飾の表現が少し異なる類型が含まれている。当時のスリランカでは、10世紀のチョーラ朝の支配期間に至るまでは、マハーヴィハーラ派とアバヤギリ派など、複数の仏教教団が混在する中で、7世紀にヒンドゥー教美術が隆盛を迎えた南インドのパッラヴァ朝の影響を受けていた¹²。そのため、10世紀以前の作例には、スリランカの仏教教団が諸派に分かれていたことから、表現に差異が生まれたと推測した。そして区分3は、チョーラ朝の支配が始まり、スリランカではヒンドゥー教の信仰が高まった。数珠状の装飾などがより詳細な造形で表された。そして区分4は、ポロンナルワでのみ見出され、①と②、③の類型は全て類型① - VIIと類型② - IV、類型③ - IVで統一され、ナーガラージャ像や侍者像の装飾は豪華で精緻な表現が施されていた。11世紀末、シンハラ人のヴィジャヤバーフ1世がチョーラ朝の支配を破り、仏教再興を試みた。その後、12世紀にはパラクラマバーフ1世によってスリランカの仏教教団はマハーヴィハーラ

派に統一された。このことから、区分4の造形は統一され、基本的な特徴を踏襲しながら、スリランカ独自の形で発展した12世紀の造立と推測した。

結論

本研究では、ナーガラージャ型ガードストーンの造形と関連作例との比較、南インドの交流などの背景から、ナーガラージャ像の造立年代を4つの区分に分け、8世紀以前、8～9世紀、10～11世紀、12世紀と推測することができた。その結果、シュレーダーの年代設定や稿者の卒業研究で結論付けた造立年代の区分とほとんど大差がなく、政治的な背景や南インドの関連作例との比較から、より深く考察し、造立年代の正確性を高めることができたと考える。本研究の対象としたガードストーンの分布は、スリランカ北部に偏っているため、より詳細な造形の展開を調査するためには、南部やその他の地域の作例の調査が必要不可欠であり、今後の研究課題としたい。

¹ Fergusson, J, *TREE & SERPENT WORSHIP: OR ILLUSTRATIONS OF MYTHOLOGY AND ART IN INDIA: IN THE FIRST AND FOURTH CENTURIES AFTER CHRIST: FROM THE SCULPTURES OF THE BUDDHIST TOPES AT SANCHI AND AMARAVATI*, ASIAN EDUCATIONAL SERVICES, 1873.

² Schroeder, U.V., *Buddhist sculptures of Sri Lanka*, Visual Dharma Publications, 1990.

³ シュレーダーによれば、19世紀のハンデッサ寺院でもキャンディ時代のムチリンダ型の作例が1点見出されている。Ibid, p.530.

- ⁴ 東京国立博物館・読売新聞社編『特別展
スリランカ 輝く島の美に出会う』展図
録、読売新聞社、2008年、p.10.
- ⁵ 同上、p.184.
- ⁶ 辛島昇『世界歴史体系 南アジア3－南イ
ンドー』山川出版社、2007年、p.96.
- ⁷ Bopearachchi, O, Disanayaka, S. and Perera, N,
“The Oldest Shipwreck in the Indian Ocean”
Ports of the Ancient Indian Ocean, edited by
Marie-Françoise Boussac, Jean-François Salles,
Jean-Baptiste Yon, Primus Books, Delhi, 2016,
p.421.
- ⁸ Ibid, p.424.
- ⁹ Ibid, p.416.
- ¹⁰ オスムンド・ボペアラッチ著・森美智代訳
「スリランカ早期仏教美術の評価」宮治
昭・福山泰子（編）『アジア仏教美術論集
南アジアⅠ マウリヤ朝～グプタ朝』中央
公論美術出版、2020年、p.359.
- ¹¹ キャンディ時代には、壁面に多くのジャ
ータカ図が描かれるが、スリランカでジャ
ータカを主題とする浮彫は本作のみである。
同上、p.361.
- ¹² スリランカのコネシュワラムやティルケー
ティシュワラムなどのヒンドゥー教寺院が
発展し、他の港湾都市でも新たなヒン
ドゥー教寺院が建立された。東京国立博物
館、p.184.



図1 ムチリンダ龍王の護仏浮彫、3～4世紀、南インド制作、スリランカ、アヌラダプラ出土



図2 一切施王本生浮彫、3世紀、スリランカ、ジェータヴァナ・ダーガバ東面ワーハルカダ正面右側柱

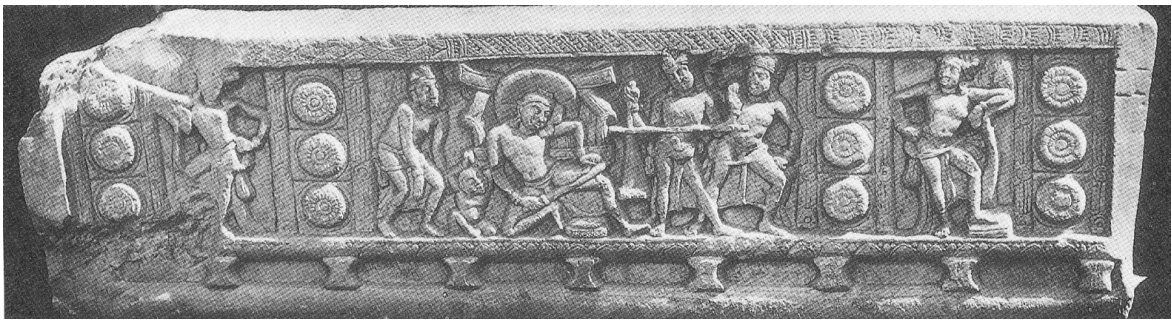


図3 シビ王本生、3世紀、南インド、ナーガールジュナコンダ第9趾出土

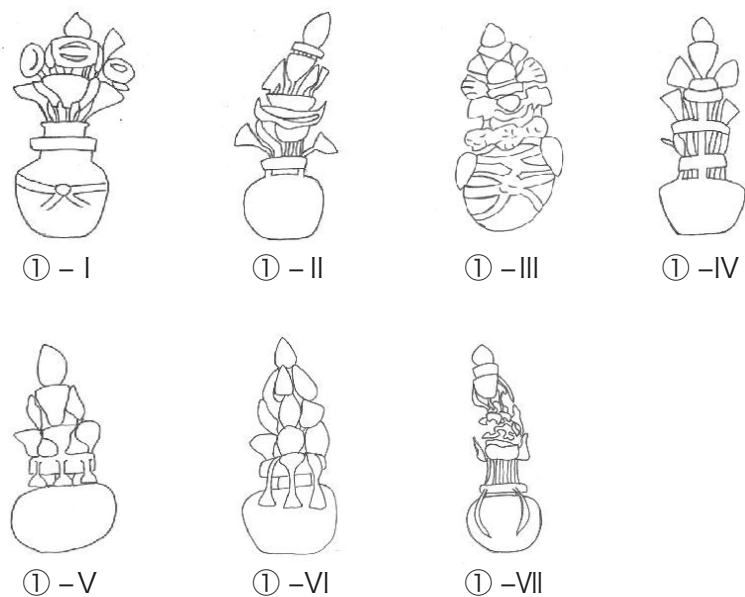


図4 ナーガラージャ型ガードストーン上の満瓶の造形の展開 書き起こし図



図5 覆鉢装飾石板、2世紀、南インド、アマラーヴァティー出土

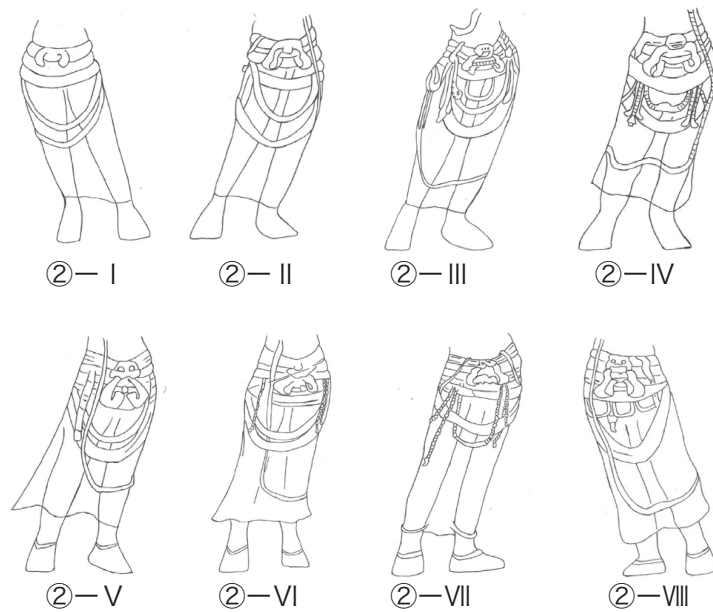


図6 ナーガラージャ型ガードストーン上の腰布の造形の展開 書き起こし図



図7 ヴィシュヌ像、750年、インド、ティルヴァール出土



③ — I



③ — II



③ — III



③ — IV

図8 ナーガラージャ型ガードストーン上の侍者像の造形の展開 書き起こし図



図9 ガナ像、9世紀末～10世紀初頭、南インド、ブラフマプリーシュヴァラ寺院出土

金田 紗弥：ナーガラージャ型ガードストーンの造形の展開と造立年代の考察－ガードストーンの形式と関連作例との比較を通して－

表1 ナーガラージャ型ガードストーン一覧表

※シュレーダー(1990)による時代設定、振り分け番号

	場所	時代※	番号※	材質	龍蓋の数	脇侍の数	①満瓶	②腰布	③侍者像	卒業論文区分	本論区分
1	ルフヌ・マハーヴィハール	6-7世紀	98G	片麻岩	7	1	×	磨耗	×	7～8世紀以前	8世紀以前
2	アヌラーダブラ	6-7世紀	100C	ドロマイト大理石	7	×	×	磨耗	×		
3	アバヤギリ付近	6-7世紀	100D	ドロマイト大理石	11	×	磨耗	磨耗	×		
4	アバヤギリ付近	6-7世紀	100E	ドロマイト大理石	7	1 左	×	磨耗	×		
5	アヌラーダブラ	6-7世紀	100F	ドロマイト大理石	7	×	×	磨耗	×		
6	アヌラーダブラ	6-7世紀	100G	ドロマイト大理石	7	×	×	磨耗	×	7～8世紀	
7	バンクーリヤ	7-8世紀	101C	片麻岩	5	1 右	Ⅱ	Ⅱ	Ⅰ		
8	インディカトウセーヤ(ミヒンタレー)	7-8世紀	101A	花崗岩	5	1 左	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ		
9	イスラムニヤ	7-8世紀	101B	片麻岩	5	1 左	他	Ⅱ	Ⅱ		
10	アヌラーダブラ考古博物館	7-8世紀	101D	片麻岩	5	1 左	他	Ⅱ	Ⅰ		
11	アヌラーダブラ考古博物館	7-8世紀	101E	片麻岩	5	1 左	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ		
12	アヌラーダブラ考古博物館	7-8世紀	101F	片麻岩	5	1 左	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ		
13	アヌラーダブラ考古博物館	7-8世紀	101G	片麻岩	5	1 右	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ		
14	アヌラーダブラ考古博物館	7-8世紀	101H	片麻岩	5	1 右	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ		
15	アヌラーダブラ考古博物館	7-8世紀	101I	片麻岩	5	1 右	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ		
16	ヴィジタブラ	不明		不明	7	1 右	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	8～9世紀以降	
17	ヴィジタブラ	不明		不明	5	1 左	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ		
18	トゥーバラマ南東(アヌラーダブラ)	8-9世紀	102A	片麻岩	7	2	Ⅲ	Ⅳ	Ⅲ		
19	トゥーバラマ南東(アヌラーダブラ)	8-9世紀	102B	片麻岩	7	2	Ⅲ	Ⅳ	Ⅲ		
20	トゥーバラマ付近(アヌラーダブラ)	8-9世紀	102C	片麻岩	7	2	Ⅲ	Ⅳ	Ⅱ		
21	ラジャ・マハーヴィハール	8-9世紀	102D	花崗岩	7	1 右	Ⅱ	Ⅵ	Ⅲ		
22	ラジャ・マハーヴィハール	8-9世紀	102E	花崗岩	7	1 左	Ⅳ	Ⅵ	Ⅲ		
23	イスラムニヤ	不明		不明	7	2	磨耗	Ⅵ	Ⅲ		
24	カバラーマ(アヌラーダブラ)	8-9世紀	102F	片麻岩	5	1 左	Ⅲ	磨耗	Ⅰ		
25	アヌラーダブラ考古博物館	8-9世紀	102G	片麻岩	7	2	Ⅲ	Ⅳ	Ⅱ		
26	アヌラーダブラ考古博物館	8-9世紀	102H	片麻岩	7	2	Ⅰ	Ⅳ	Ⅱ		
27	イスラムニヤ	8-9世紀	102I	片麻岩	5	1 左	Ⅲ	Ⅴ	Ⅱ		
28	メニク・ウェヘラ(ポロンナルフ)	8-9世紀	102K	片麻岩	7	2	Ⅰ	Ⅳ	Ⅲ		
29	メニク・ウェヘラ(ポロンナルフ)	8-9世紀	102L	片麻岩	7	2	Ⅰ	Ⅳ	Ⅲ		
30	カバラーマ(アヌラーダブラ)	8-9世紀	103A	ドロマイト大理石	7	2	Ⅲ	Ⅳ	Ⅲ	8～9世紀	
31	トゥーバラマ(アヌラーダブラ)	8-9世紀	103C	片麻岩	5	1 右	Ⅳ	Ⅳ	Ⅱ		
32	トゥーバラマ(アヌラーダブラ)	8-9世紀	103D	片麻岩	5	1 左	Ⅳ	Ⅳ	Ⅱ		
33	マハーボディ堂	8-9世紀	103E	片麻岩	5	1 右	Ⅱ	Ⅴ	Ⅱ		
34	バンクーリヤ	不明		不明	5	1 右	Ⅱ	Ⅳ	Ⅲ		
35	バンクーリヤ	不明		不明	5	1 左	Ⅱ	Ⅳ	Ⅲ		
36	ポロンナルフ	12世紀		不明	5	1 右	Ⅱ	Ⅳ	Ⅲ		
37	マハーボディ堂	8-9世紀	103F	片麻岩	7	2	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ		
38	マハーボディ堂	8-9世紀	103G	片麻岩	7	2	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ		
39	アヌラーダブラ考古博物館	8-9世紀	103H	片麻岩	7	2	Ⅲ	Ⅳ	Ⅱ		
40	アバヤギリ 西方	8-9世紀	103I	片麻岩	7	2	Ⅲ	Ⅳ	磨耗		
41	アバヤギリ 西方	8-9世紀	103K	片麻岩	7	2	Ⅱ	Ⅳ	磨耗		
42	ラトナバーサーダ	8-9世紀	103L	片麻岩	7	1 右	他	Ⅳ	Ⅱ		
43	ティリヤーヤ	8-9世紀	104B	片麻岩	7	1 右	Ⅴ	Ⅵ	Ⅱ	10～11世紀	
44	ティリヤーヤ	8-9世紀	104C	片麻岩	7	1 左	Ⅴ	Ⅵ	Ⅱ		
45	ラトナギリワタダーゲー(ポロンナルフ)	8-9世紀	133A	片麻岩	7	2	Ⅱ	Ⅳ	Ⅳ		
46	ラトナギリワタダーゲー(ポロンナルフ)	8-9世紀	133B	片麻岩	7	2	Ⅱ	Ⅳ	Ⅳ		
47	ルワンワリセーヤ 東方	9-10世紀	104F	片麻岩	9	2	Ⅴ	Ⅳ	Ⅲ		
48	トゥーバラマ(アヌラーダブラ)	9-10世紀	104I	片麻岩	9	2	磨耗	Ⅷ	Ⅲ		
49	トゥーバラマ南東(ポロンナルフ)	9-10世紀	104M	片麻岩	9	2	Ⅴ	Ⅳ	Ⅲ		
50	マハーボディ堂	9-10世紀	104A	片麻岩	7	1 右	Ⅵ	Ⅶ	Ⅲ		
51	クッジャティッサ・パツパタ	10世紀	104D	片麻岩	7	1 右	磨耗	Ⅴ	磨耗		
52	クッジャティッサ・パツパタ	10世紀	104E	片麻岩	7	1 左	Ⅵ	Ⅴ	磨耗		
53	クッジャティッサ・パツパタ	10世紀	104G	片麻岩	7	1 右	磨耗	Ⅵ	Ⅲ		
54	クッジャティッサ・パツパタ	10世紀	104H	片麻岩	7	1 左	磨耗	Ⅵ	Ⅲ		
55	アバヤギリの僧院	10世紀	104K	片麻岩	9	2	Ⅵ	Ⅴ	Ⅲ		
56	アバヤギリの僧院	10世紀	104L	片麻岩	9	2	Ⅵ	Ⅴ	Ⅲ		
57	ハタダーゲー(ポロンナルフ)	1150-1200	133E	花崗岩	7	2	Ⅶ	Ⅳ	Ⅳ	12世紀	
58	ハタダーゲー(ポロンナルフ)	1150-1200	133H	花崗岩	7	2	Ⅶ	Ⅳ	Ⅳ		
59	ラトナギリワタダーゲー(ポロンナルフ)	1150-1200	133F	花崗岩	7	2	Ⅶ	Ⅳ	Ⅳ		
60	ラトナギリワタダーゲー(ポロンナルフ)	1150-1200	133G	花崗岩	7	2	Ⅶ	Ⅳ	Ⅳ		
61	ラトナギリワタダーゲー(ポロンナルフ)	1150-1200	133C	花崗岩	7	2	Ⅶ	Ⅳ	Ⅳ		
62	ラトナギリワタダーゲー(ポロンナルフ)	1150-1200	133D	花崗岩	7	2	Ⅶ	Ⅳ	Ⅳ		
63	ラトナギリワタダーゲー(ポロンナルフ)	1150-1200	133K	花崗岩	7	2	Ⅶ	Ⅳ	Ⅳ		
64	ラトナギリワタダーゲー(ポロンナルフ)	1150-1200	133I	花崗岩	7	2	Ⅶ	Ⅳ	Ⅳ		
65	ランカーティラカ	1153-1187	134A	花崗岩	7	2	Ⅶ	Ⅳ	Ⅳ		
66	ランカーティラカ	1153-1187	134B	花崗岩	7	2	Ⅶ	Ⅳ	Ⅳ		
67	ランカーティラカ	1153-1187	134D	花崗岩	7	2	Ⅶ	Ⅳ	Ⅳ		
68	ランカーティラカ	1153-1187	134H	花崗岩	7	2	Ⅶ	Ⅳ	Ⅳ		
69	ランカーティラカ	1153-1187	134I	花崗岩	7	2	Ⅶ	Ⅳ	Ⅳ		
70	ランカーティラカ	1153-1187	134E	花崗岩	7	2	Ⅶ	Ⅳ	Ⅳ		
71	ティワンカピリマゲー	1153-1186	134F	花崗岩	7	2	Ⅶ	Ⅳ	Ⅳ		
72	ティワンカピリマゲー	1153-1186	134G	花崗岩	7	2	Ⅶ	Ⅳ	Ⅳ		

